

# 市民研 通信

No.21

2013年11月

通巻149号

## ●市民研ホームページに掲載中の最新の論文

～すべてをただでもダウンロードできます

巻頭言

食品の回収・廃棄はどこまで必要？

小林友依(市民研・理事)

プラスチック微粒子による海洋汚染のこと

上田昌文(市民研・代表)

ニュース動画翻訳

01 携帯電話電磁波曝露の訴訟

02 偽電による破局：携帯電話と子どもの脳

翻訳

不確実な遺伝-環境的曝露の継世代的効果

京都だより

移ろうもの、担うこと

吉澤剛(市民研・理事)

連載 第3回

学問へススメ ～技術系営業マンの学位取得奮闘記～

佐藤隆

●会員向け送付資料

・会員宛 会報 007

・サイエンスアゴラ関連 チラシ 2種類

・アイカマ お茶の水女子大学エアードーム上映 チラシ

・市民研 20周年記念イベント チラシ

・会員倍增へのご協力お願いチラシ+レターパック

●市民研代表の上田の講演会などのご案内

・放射線教育：11月7日いわき市、11月12日会津、

11月16日練馬区、11月26日福島市、12月29日世田谷区

・原発/エネルギー問題：11月21日川崎市

・放射線問題：12月18日港区、1月24日小平市

・科学と市民参加：11月19日千代田区 など

詳しくは市民研にお問い合わせください。

## 食品の回収・廃棄はどこまで必要？

小林友依(市民研・理事)

10月12日に、はごろもフーズから販売されている「シーチキン マイルド」シリーズより基準値を上回るヒスタミンが検出され、喫食量・個人差により、アレルギーに似た症状が出る場合がありますと、お詫びと回収協力のニュースが流れました。

新聞の見出しでは「アレルギー物質 基準超え シーチキン672万個回収」などと記載されており、本文にはヒスタミンについて触れず、誤解を招く書き方だと思えました。ヒスタミンは、アレルギーのような症状を引き起こしますが、タンパク質ではありません。アレルギー物質(アレルゲン)ではなく、過剰摂取をした場合は誰にでも発症する恐れのある食中毒の原因物質であり、注意が必要ですが、このような見出しでは、私は何もアレルギーを持っていないから大丈夫、なんて勘違いをしてしまうのではないかと、心配になったものです。

さて今回のニュースを受け、食品の自主回収はどのくらいの頻度と内容で起きているのかが気になり、東京都の食品安全情報サイトや厚生労働省の食品衛生法に違反する食品の回収情報等を確認してみました。ほぼ毎日のように製造・販売業者から報告が上がっていることに驚いてしまいました。

回収された食品をどうするのか、表記漏れ(期限表示を設定より前に表記)で回収協力を発表した某会社に問い合わせをしたところ、「廃棄しました」との回答を受け、さらに驚きました。

賞味期限を大きくずれて食べた際には、健康被害が出る恐れがあるかもしれないが、そこまでしなればいけないの？もったいない！と思いましたが、消費者はにおいや色など異常があれば気付けないのかしらと、不思議に思いました。

様々な理由で食品が回収・廃棄されていますが、その中には健康影響は全く心配されない理由もありました。それにもかかわらず、無用に廃棄されてしまう現状があります。それは企業側だけが悪いわけではなく、企業側に消費者のために丁寧すぎる対応が求められること、また消費者が企業に頼りすぎていることにも問題があるのかもしれない。

消費者は自分なりに得た知識や経験にもとづいて判断し、企業には丁寧すぎない対応を求めても良いのかもしれないと思つたものです。食品も限りある資源ですからね、無駄なくいただきたいものです。■

## プラスチック微粒子による海洋汚染のこと

上田昌文(市民研・代表)

今後、深刻な環境汚染として焦点となるだろう問題の一つに、プラスチック微粒子による海洋汚染が挙げられるだろう。漁業関連で海に廃棄されている物品(捕獲に使う網や器具類、私たちが何気なく路上に使い捨てているプラスチック容器といった類)それらの一部は各地の海岸へたどり着く「漂着ゴミ」として膨大な量になっていることが知られている。そして廃棄物処分場からの漏洩分などが海を漂流している間に摩擦や紫外線などの影響で微粒子化することがわかっているが、それだけでなく、例えば工業的ないしは日常的に用いる研磨剤の中に含まれているプラスチック微粒子が排水を通じて直接海に流れ出ているケースもある(例えば練り歯磨きの中にもこの種の微粒子を使っている製品があるという)。世界全体でいっただれどくらい量のプラスチックが微粒子化して海に漂っているのか検討もつかないが、恐ろしいのは、目に見えないほど小さくなるとプランクトンや魚介類の身体を作る様々な細胞に取り込まれるものが出てくること、そしてそうした微粒子は周りの有毒物(例えばPCBやDDT)を吸着して運び屋となることだ(東京農工大の高田秀重教授の調べ)。漂い続けて行き着く先は、一つは海岸であり、そしてもう一つは「太平洋(あるいは大西洋)ごみベルト地帯」と命名される特定海域で、ここではプラスチック微粒子が表面を薄く覆う広大な「絨毯」が形成されているという(NHKBSで放送されたドキュメンタリー『海の怪物 プラスチック』に詳しい)。

プラスチックそれ自体は毒性はほとんどないといわれるが、例えば添加剤のノニルフェノールなど環境ホルモンの影響は、多種の魚介類の生殖異常を引き起こすおそれがあり、それが最終的に生態系にどうダメージをもたすのか、予測が難しい。それに加えて、毒性と残留性の高い「過去の遺産」であるPCBなどの有機塩素系の化学物質が、これまた残留性の高いプラスチック微粒子に吸着し、「懸濁」が起こる(先のゴミベルト地帯の「絨毯」は毒性の高い「スープ」になっている可能性がある)。それらが食物連鎖によってヒトにどう跳ね返ってくるのか、今のところ誰もわからない。海が、何百年も消えないといわれるプラスチックの巨大な墓場となってしまうことだけは、なんとしても回避しなくてはならないだろう。■

資料：『プラスチックの海-おひやがされる海の生きものたち』(海洋工学研究所出版部 1995)『海ゴミ 拡大する地球環境汚染』(中公新書 2007)『プラスチックスープの海 北太平洋巨大ごみベルトは警告する』(NHK出版 2012)